

平成25年度 入学宣誓式 学長告辞

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。

本日ここに入学宣誓式を迎えた 学部生698名、大学院博士前期課程446名、博士後期課程 38名の皆さんに対し、京都工芸繊維大学を代表し、心から歓迎の意を表します。

今日、皆さんの新しい力を迎え入れることができたことは、京都工芸繊維大学にとって、誠に大きな喜びであります。

京都工芸繊維大学は、理工系の大学であります。科学と芸術の融合を目指して教育研究活動を行っています。大学理念を大胆に簡略化すれば、知と美と技、そして学風の底流に流れる京の四文字に縮約することができます。我々はこのキーワードが指し示す方向に向かって活動の舞台を整えるため、3つの学域と13の博士前期課程の専攻と5つの博士後期課程の専攻を設置し、嵯峨地区や京都府北部の日本海に面した京丹後市にも活動拠点を整備し、大学個性を伸長するために教育研究活動を展開しています。洗練されたモノづくりを文化にまで高めてきた京都という地の利を活かし、いま京都工芸繊維大学は、グリーンイノベーション、ライフイノベーション、カルチャーイノベーションの3つの領域において、実践的なモノづくりを通じて教育研究を行っています。

新入生の皆さんは、希望と喜びを持って、今日の入学宣誓式に臨まれたことと思います。本日は、あなた方新入生にとって、人生の中でも最も晴れやかな記念すべき日であります。同時に、私たち国立大学に課せられた期待の大きさを認識し、困難な課題に立ち向かう勇気を奮い起すべき日でもあります。

私たちは、既存の専門領域内の技術の積み重ねだけでは、解決できそうにない課題に直面しています。苦しくともまじめに努力すれば解決策が得られるという幸せな状態にはない。自分一人の狭い専門領域に閉じこもってモノづくりに専念するという幸せな状況は許されないという悲観論が日本を覆っています。一方、全国の学長会議では、大学が自信をなくし、方向性を見失うと、日本社会にもっと大きな危険がもたらされるだろうと議論されています。

今日の入学宣誓式にあたり、京都工芸繊維大学が掲げる理念を踏まえ、科学と芸術、知と美と技に通底する「モノづくり」について改めて考え、

新入生諸君にモノづくりというものが、学術文化にどのように貢献してきたのか、を伝えたいと思います。

そもそも、学問の府である大学においては、理論的考察が第一義であり、具体の技術は一段低く見られる傾向があります。モノづくりは、個別的であり、具体的であり、現場主義であり、肉体作業を伴うものであります。それゆえに全体を見渡して理論化することが困難な分野であり、言葉にすることが苦手な世界であります。こうした状況から、モノづくりは理論研究より低く見られる傾向が出てきます。

京都工芸繊維大学の国立の教育研究機関としての役割を考えると、実践的モノづくりが、いかに社会の役に立つかを喧伝するだけでなく、世界あるいは人間を理解するうえにおいても、モノづくりは哲学と同等の役割を果たし、学術文化の形成に寄与してきたことを常に確認し続けることが必要です。我々が、実務の世界でもアカデミアの世界でも、自覚と自信を持って活躍できるように、モノづくりという、このどこか楽観的で、根拠のない自信に満ちた活動領域に、理論的な根拠あるいは歴史的な根拠があることを確認することが必要なのです。

例えば、「隠喩としての建築」という著作の中で、柄谷行人は次のように語り始めます。

「古代ギリシャにおいて、哲学者を定義するにあたって、建築家を哲学者の隠喩として用いたことはよく知られている。ギリシャ語において、建築はアーキテクトンと言うが、この語は、始原や始まり、原理を意味するアルケーと職人を意味するテクトンの合成語である。つまり、ギリシャ人にとって、建築は単なる職人の技術ではなく、原理的な知識を持ち、個別の技術や職人を統括し、製作を企画立案、指導する技術と理解されていた。語源の詮索はともかく、重要なことは、プラトンやアリストテレスが哲学者を建築家になぞらえ、哲学を知の建築、知的構築物と見なした点である。プラトンはその著「饗宴」の中で、あらゆる技術に属する製作は、創作であり、それに従事する工作者は創作者なのである、と言っている。」

このように、モノづくりの本質は、世界を構築するという作業であります。西洋文明の起源であるギリシャにおいても、偉大な職人は、哲学者と肩を並べ、世界を言葉で構築するか、世界をモノで構築するか、の違いはあるものの、両者の役割の違いはなかったのであります。

中世以降の歴史ではどうでしょうか？ 世界を読み解く作業を長年にわたり地道に遂行してきた聖書解釈学という分野において、次のような指

摘があります。解釈学にはいくつかの段階があり、第一の段階は、還元的解釈と呼ばれます。これは複雑に見える現象を、本質的で端的な言葉に要約する方法のことです。例えば、見かけ上極めて複雑な天体の運行について、ニュートンは万有引力の法則という極めて単純明快な法則を見出しました。複雑な宇宙の営みが、一本の方程式に還元できる、この驚きこそ還元的解釈の魅力です。次に、第二の段階は、構成的解釈と呼ばれるものです。例えば、人間とは何かという問いかけに対して、還元的解釈では、人間は考える葦であるとか、人間は言葉を話す動物であるというような答えを期待します。しかし構成的解釈においては、ズバリ、ロボットを創る。そして、人間と全く同じロボットが作られたとき、「そうか、人間とは実はこのようなモノであったのか」という納得の仕方、理解の在り方を構成的解釈と呼ぶわけです。

還元的解釈が、観察から分析を経て、原理の解明に至ることを重視していることに対し、構成的解釈では、企画と製作を重視し、実験的であり、試行錯誤的であり、そして何よりモノづくり的です。

今日、科学とは、観察データから得られた発見の集積というよりも、仮説に基づいて創り出された発明の集積と見なされています。あえて言えば、分析からモノづくりへ、作ってみせる、製作によるデモンストレーションへと研究の姿勢が移っています。

ところで、還元的思考と構成的思考は、究極の姿は似てくるという事実には留意すべきです。複雑な前提から出発して単純なステートメントに到達するか、逆に単純なステートメントから出発して多様な世界を構成するに至るか、両者は方向が逆であっても、究極の姿は、突き詰めれば、近代的な思考の基礎となる形式化に至ります。

形式化の傾向は、20世紀の色々な芸術分野、文学や人文科学にも共通してみられる動向ですが、最も顕著な例はもちろん数学です。20世紀の数学界の巨人ヒルベルトの構想は、数学を形式的な体系とすること、そしてこの形式的体系の無矛盾性を証明すること、でありました。しかし、1931年に、ゲーデルが「不完全性定理」を発表します。不完全性定理とは、無矛盾な体系は不完全であり、無矛盾な体系には、真か偽かの決定が不能な命題が存在してしまう、というものです。

例えて言えば、「私はうそをついている」といった主張は真偽の決定が不可能です。もし真だと仮定すれば、文意は真となるため、偽と判

定せざるを得ない。偽と仮定すれば、文意は偽となるため、真と判断される。このように通常の言語体系の中で真と偽が判定できない文が生じることは、よく知られています。

1951年にゲーデルがアインシュタイン賞を受賞したとき、ヒルベルト学派の若き俊秀フォン・ノイマンは、受賞パーティーで次のように述べています。

「証明することも否定することもできない数学の命題が存在する。ゲーデルはまず、決定不能な数学的命題が存在することを証明した。さらにセンセーショナルなことに、数学は無矛盾である、という特定の命題が決定不能であることを証明した。ゲーデルは、数学のみならず、論理的に形式化される、厳密で徹底的な記述を求めるすべての体系について、この定理を証明したのである。こうしてすべての形式化される体系は、内部矛盾を含まないことを自分自身の体系の中で証明することができないのである。」

ゲーデルと親交のあった日本の数学者、竹内外史は、その著作「ゲーデル」の中でそのことに触れていました。

我々の学問体系が依拠しようとする、数学や論理学の体系にはある種の曖昧さが潜んでいます。我々の近代社会は、自然科学であれ社会科学であれ、論理的な構築物を目指してきましたが、その構築物は、真偽の判定を巡って振動を続ける構築物なのです。知的で透明な真理の宮殿は、曖昧さに揺れている。1931年に生じた数学上の大発見は、理論的な構築物の設計に関するある種の限界が示されたと思われまます。

一方、実践的な個別の領域に関してはどうでしょうか。私たちは今後、どこまでも、バベルの塔を積み上げていくのでしょうか？ これからも懲りずにイカルスの羽を取り替えても宇宙の果てに飛び出していくのでしょうか？ 答えはもちろん、イエスであります。モノづくりの本質は個別の有用性を超えて、学術的な高みに至ることであり、決して高さを恐れてはなりません。

大学では、常識を疑い、よく知っている見慣れた概念を批判的に学ぶことによって、自分の考えを深めていただきたいと思います。また、演習や実験を通じて、技術や技法を習得し、これを身体化すること。一方、基礎となる概念や困難な概念を自分のものとするには、時間がかかり、苦勞が伴いますが、その結果、判ったという瞬間がやってきます。この実感が大切です。モノづくりによる構成的な解釈であれ、還元的な解釈であれ、判

ったという瞬間の喜びを、たくさん積み重ねることが人生の財産になっていくのです。

結びにあたって、今日から諸君が学ぶべき大学、京都工芸繊維大学をよく知り、そして好きになること。それが自らの学習と研究活動に自信と誇りを与え、より困難な課題、より高い課題に取り組む勇気を与えてくれるからです。私たちの教育成果や研究成果は、常に世界とつながっており、海外からも見られていることを意識して学生生活を送ってください。そして、京都工芸繊維大学が世界一の大学であるという確信を持って、勉学に励み、卒業・修了していただきたいと願っています。勉学や研究において、一つでも多くの感動を体験し、それらを友人と共有することによって、実り豊かな学生生活を送られることを祈念して、お祝いの言葉といたします。

平成25年4月5日
京都工芸繊維大学長
古山正雄